

ブラツクシスター様で

ヌードデッサンの練習

したくない!?

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止



「是非、絵のモデルをしてくれないか!」
屋下がりのラステーション教会で友人である絵描きの男にそのように懇願され、ユニは困惑していた。

「アタシが? 絵のモデル?」

人差し指で自分を指しながら訊ねてみる。

「ああ。人体デッサンの練習をしたいんだけど、モデルになってくれそうな身近な女の子といえはユニちゃんしかいないよ……」

「ふーん。まあ確かにアタシって見るからにモテなさそうだもんね」

ユニの辛辣な言葉に「うぐっ……」と言葉を呑む男。

「な、なあ頼むよ! ユニちゃんにしか頼めないことなんだよ」

両手を合わせて拝み倒すように言った男の言葉にビクリと反応した。

「アタシにしか頼めない? ……そ、そこまでいうなら仕方ないわねっ」

自分ししか出来ない頼りにされ、満更でもない様子で応えるユニ。

「いいわ、やってあげる。このアタシが協力してあげるんだから、感謝しなさいよね!」

「ユ、ユニちゃんありがとぅー!」

絵描きの男は思わず涙を浮かべながら感謝の言葉を告げる。

「それで? 何をすればいいわけ?」

「じゃあまずは教会の空き部屋に移動しようか。いつもそこで絵を描かせてもらってるんだ」

ラステーション教会では、特に使用目的のない部屋は一般開放して国民が自由に使えるようにしていた。そして空き部屋に移動する二人。

「さてと、デッサンモデルをするにあたってちょっとお願いがあるんだけど、女神様の姿になってもらえないかな?」

「それってアタシの女神化した時の姿をモデルにするってこと?」

「そうなるかな。ブラックシスター様の細身の身体の方がデッサンの練習にはもってこいなんだ」

「へえー。ま、別にいいけど」

シュベーンと辺り一面を光り輝かせユニはブラックシスターに変身する。

「これでいいわけ?」

「ばっちりだよユニちゃん!」

「本当は貧乳の身体を描くのが苦手だから変身した姿を参考にしたい」

「つてのが本音だけど黙っておいた方がいいよな……」

男は心の底に本当の目的を隠したまま、その小さな身体を見た。

「じゃあその着てる服を脱いでこっちに立ってよ」

「着てる服を……って、はあ!」

ユニは男がしれっと放った言葉に驚きを見せながら訊ねる。

「な、なんで服を脱がないといけないのよ!」

「あれ……? スードデッサンだって言っただけじゃない?」

「言っただけじゃないよ!! ……もしかしてアタシ、アタシの裸が見たいだけなんじゃないわよね!」

ヌードに慣れないといけないという一番大切なことを伝え忘れていた男に、ユニは怒号の声をあげた。しかし男は紳士的にそれをなだめる。

「そんなことは絶対にない! これはあくまでも芸術のためなんだ! 決してエロい目的とかじゃないしもちろんここで見たことなどは口外しない!」

それにユニちゃんこないだ言ってくれたよね!? 一流の画家になる夢を応援してくれるって!!」

「そ、そりゃ言っただけさ……!」

「それに一度やると言ったことを曲げるのは自分の信念に反するんじゃない?」

「あ……ッ! もう分かったわよ!!」



協力すると言った手前、断るワケにもいかずユニはプロセスユニットを脱ぐことにした。
流石に人前で裸を見せるのには相当な勇気が必要だったが、これも友人の頼みを聞くためだと自分に言い聞かし次々と装備を外していく。
まずは胸……そして脚……と順々に装備を外していき、残るは上下のビキニ部分だけとなった。

普段から女神化すると他の人に比べて露出度が高いとは思っていたが、その小さな面積でさえも身体を隠すという重要な役割を果たしていたのだと今になってわかる。

ほぼ裸に近いようなプロセスユニットでも大事な部分が見えるのを見えないのは恥ずかしさに天と地ほどの違いがあるのだった。

ドキドキしながらユニは胸のブラ部分へ手をかける。
そして一呼吸……覚悟を決めて思い切ってグイッと上へズラす。

ユニは女神化すると胸が「軽量化」という名のサイズダウンをしてしまい、それ故に変身した時の胸が少しコンプレックスだった。

変身前はネブギアとそう変わらないほどの大きなのに世間でユニが貧乳というレッテルを貼られているのは全てはこの「変身すると小さくなる胸」が原因であろうということは想像に容易かった。

最近ではサイズダウン——もとい軽量化すると銃を構えた時に邪魔にならないという利点を受け入れることで無理矢理納得していたが心の底ではそれが自分をこまかす為のものだと気付いていた。

そんな小さな胸を人前に披露するユニは何とも言えない気持ちになる。胸のプロセッサユニットを完全に脱ぎ終えるとすぐさま手で胸を隠した。なんとかやりきったと安堵の顔を見せるユニ、もといブラックスターだ。がまだ下半身が残っている。

そのままの勢いで脱いだ方がダメージが少ないだろうという考えの基、ユニは左手で胸全体を隠しながら右手のみでパンツ部分を脱ぐことにした。片手のみで脱ぐため、右側を降ろし……次は左側を脱がし……と通常より時間をかけながらゆっくりゆっくり少しずつ下に降ろし、ついにはお尻の割れ目や太ももの付け根が露わになる。

大事な秘部が見えるか見えないかのギリギリのところまで降ろし終えた後、一旦手を止め「はあ……」ため息を洩らす。

再度覚悟を決めてゴクリと生唾を飲み込み、そして一気にズルッとパンツを下まで降ろすことに成功した。

上半身のみならず下半身までもが何も身に付けていない状態となり、真正銘生まれのままの姿になる。

変身前よりも変身後の方が少し身体的に若くなるのかブラックシスターとなった彼女のアソコには毛が生えておらずツルツルとして幼さを感じさせ、一方でお尻の方はキュッと引き締まっただけで一切垂れておらず、初めて人前で晒された裸体は何とも言えない神々しさがあつた。

お風呂などを除いてまだ誰にも見せたことのない大事な部分が入前で見え、今まで味わったことのない羞恥心が彼女に襲い掛かる。

彼女は手で身体を隠し、全て脱いだことを伝えた。
彼女の前に裸になるという異常な光景に目の前にいる男の顔をまともに見ることが出来ず、全身が紅潮していく。

「エ、エロい目で見たら殺すわよ……」
赤面する顔を横に逸らしながら絶対にいやらしい目で見ないことや、よこしまな気持ちでデッサンの練習をするわけではないことなどを再度確認した後、いよいよラストেশションの女神候補生をモデルにしたヌードデッサンが始まるのだった。



まずは部屋中央に設置した椅子に座り、胸や股部分などが見えないように必死に両手で隠しながら指示を仰ぐブラックシスター。

「大丈夫、やることは簡単だよ。こっちが指定したポーズをとってもらって、それを俺がクロッキーする。1ポーズ15分くらいを目安にしようかな。終わったらまた次のポーズを15分。それをまた描く……ってな感じで。ポーズをとるのがキツくなってきたら遠慮なく言って構わないからね」

いたって真面目な顔をして説明する絵描き。一切のいやらしい視線を感じさせない絵描きの態度に約束通り変な目で見ていないやらしさを感ぜて少し安堵するユニだった。

「わ、分かったわ。それで最初のポーズはどうすればいいワケ？ 恥ずかしいんだから、早く終わらせましょ」

頬を赤らめながら身体をぎゅっと強張らせる。大丈夫……ただポーズを取るだけだから……。そう自分に言い聞かせて覚悟を決める。

「じゃあまずはそのまま座って、脚を少し組み気味にして、手は降ろして両脇に置く感じで」

「こ、こかしら……？」
スッと手を降ろし、胸が露わになる。既に緊張状態であり、うっすらと汗を滂ませていた。そして脚も少しばかり片足に乗せる。

脚を組むことでギリギリではあるが彼女の秘部は絵描きからは見えない角度になり、ユニは下半身の大事な部分を隠す必要がなくなったことに少し安心した。

しかし問題は上半身だった。手を両脇に置くことで完全におっぱいを晒す形になってしまい、胸が見られているこの状態で彼女の羞恥心はほとんど煽られることとなる。

「もはや胸の大きさはおろか、乳首の色や形、乳輪の大きさにいたるまでその全てが目目の前の男の前に晒されているのだ。」

「うう……っ！ は、恥ずかしい……！ でもこれもアイツの絵の練習の為……アタシが文字通り一肌脱ぐって決めたんだから我慢しないと」

身体が一気に熱くなる。

その火照った身体を冷やそうと、彼女の身体はうっすら汗を滂ませる。ユニは裸体を晒す恥ずかしさに耐えつつもチラッと絵描きの方を見た。

もう既にクロッキーに入っていたようにユニの方と自分のキャンパスを交互に見比べながら筆を進めている。

その真剣な姿にユニも応えたいと思ひ、そのまま同じポーズを取り続けるのであった。

「1ポーズ15分って言ってたわよね……短いようで長く感じるわね……人間の集中力は15分が限界だと言われている。そのため15分おきに一段落を付けるのは作業をするにあたって最も効率が良いとされているのだ。」

しかし逆に言えばユニの裸体は集中力の高い状態でじっくり観察されるということでもある。

「女神たる者、いつでも他人に見られてもいいように意識しないと駄目よ。よく姉のノワールが言っている言葉通り毎日身体のケアは怠っておらず、変身すると胸こそ小さくなるもののキュッとくびれのある細身のウエストや引き締まったヒップ。」

決してだらしのない身体ではないわよね……と自分に言い聞かせる。

（でも恥ずかしいから早く時間経って……っ！！）
心の底から強くそう願うのであった。



「よし、じゃあ次のポーズしてみようか」
絵描きがその声をあげる。

その言葉を聴いてようやく長い15分間が終わったのだと気付いたユニ。自然に「はあ……」とため息が出た。やっと最初の15分を乗り越えたのだ。その15分間はお互いに無言で、ただひたすら鉛筆が紙の上を走らせる音が部屋の中で鳴り響いていた。

特に体付きのことなどを言及されることもなく、本当にただ何も喋らず椅子の上に座ってまだ15分。まだ最初のポーズしかしてないのよね……)

ずっと羞恥心に耐えながらポーズをするユニにとってはこの15分間は永遠とも感じられる時間だった。

あとどのくらいかこの時間このモードモデルをするのかは分からないがこの先もずっと恥ずかしさに耐えないといけないのかと思うとますます気が滅入ってくる。

しかしそうも言ってもらえない。彼女は次の指示を聞くことにした。

「次はどうすればいいのかしら？」

「次もそのまま椅子に座った状態でいいから、腕を上げて頭の後ろで手を組んでもらえるかな？」

「こ、う、ね」

絵描きの指示を受けてスッと腕を上げ、そして頭の後ろで手を組む。

いわゆる無抵抗のポーズというやつだ。

腕を上げることにより、胸の筋肉も引く張られ自然と乳首の位置も上上がる。そして何となく彼女の腕がその姿を現すこととなった。

いつも着ているミスティックブラックや変身した時のプロセッサユニットでも腕が見えるデザインのため、日頃から身体のケアを怠っていないので腕を見せることに對しての羞恥心はあまり無い。

……あまり無い、が裸を晒している緊張から今は身体が少し汗ばんでいる上にデッサンの練習という名目上この姿が絵にされるのだから少しばかり不安になっていた。

(だ、大丈夫よね……？ そりゃ普段から見えてもいいようにはしてるけど、そんなに他人に見せる部分じゃないしこうして敢えて晒しているってのもなんか変な感覚よね……)

汗の匂いが出やすい部分を人前でおおっぴろげにしているというのはやはり年頃の女の子としては何か思うところがあるのだろう。

何故か次第に変な気分になってくる。
そんなことを考えていると、ふと「シャ……シャ……」と鉛筆が紙の上を走る音が聞こえた。

(あ、もう始まってんだ……)

その音を受けて初めて絵描きがかろう既にクロッキーを始めていたことに気付く。

自分もポーズに集中しようと思った彼女だが、気になる点があった。それは裸を見せられているという妙な興奮から乳首が勃起していることだった。

寒さなどでも乳首は硬くなるが、今回のそれは明らかに寒さなどではなく性的な興奮によるものであることは誰が見ても明らかである。

上に向かって硬くツンと尖って勃起している乳首は、ブラックシスターの僅かにしか膨らんでいない胸の頂上でその存在をより主張させていた。身体が性的な興奮状態にあることを証明しているその乳首を隠してしま

いたかったが腕を頭の後ろで組んでいるがためにそれもままならない。彼女は頬を赤らめさせながらただひたすら早く終わることだけを願いつつ、その勃起した乳首を絵描きの前に晒し続けるしかないのだった――



「はい、オッケー。次のポーズお願い出来るかな？」

「っ……………はぁ」

興奮状態によって勃起した乳首や汗ばんだ腋などを晒し続けることさらに15分。

ようやく2回目のポーズが終わり、安堵のため息が出た。

「次はどうすればいいの？」

「じゃあ今度はそのまま立って後ろを向いてもらえるかな？」

言われるがままに後ろを振り返るユニ。

綺麗な背中やハリのある引き締まったお尻が男の前に姿を現す。

(今度は背面なわけね……………後ろ向くだけなら相手の顔を見なくて済むしこれなら楽勝ね！)

グッと心の中でガッツポーズを取る。相手と反対側を向いていれば視線

を感じることもなく恥ずかしさも軽減するだろうと考えたからだ。

しかし内心喜んでいたユニを余所に絵描きは更なる注文をつける。

「そしてそのまま手を椅子につけて、お尻を突き出してほしい」

「……………え？」

後ろを向くだけだと安心してしまっていたユニは絵描きの言葉に不意打ち

を食らった。

お尻を？突き出す？

言われた通りのポーズをしようと試みるも、これでは女の子の大事な部

分が見えなくなってしまふ。

誰にも見せたことがない自分の性器がモロ見えになるのは流石に抵抗が

あったが、ここで恥らうほうが返ってダメージが大きくなるような気がし

たのでユニはそのまま勢いに任せてポーズすることにした。

そして椅子に手を置き、ぐいっとお尻を突き出す。

「こ、これでいいの!？」

相手に陰部はおろか、お尻の穴までも丸見えになっていることを意識

してか、一層赤くなった表情でいつもより大きな声をあげるユニ。

(み……………見られてる……………)

初めて異性に自分の秘部を晒している状況にかつてない緊張が走った。

(……………アタシのアソコ、変じゃないわよね……………?)

自分の性器がどう見られているのか、考えれば考えるほど変な気持ちが高

ぶつていく。

普段の何倍もの速さで様々な思考が次から次に浮かんでくる。

(そ、う、い、え、ば……………男の人って女の子の裸を見て、コーファンするって聞いた

ことあるし、まさか今も……………?)

ふとその考えが頭をよぎった途端、ユニの身体は一瞬ビクリと反応を見

せた。

(っ……………あ、だ……………だめえっ……………)

ふと股の部分にぬるぬるする感触を覚える。

ユニはこの感触が何を意味しているのかを理解していた。

ユニのアソコが愛液で湿っていき、

異性に女の大事な部分を晒している今のこの状況に身体的な興奮を

覚え、花びらの奥から女汁を溢れさせる。

止まってほしいと願えば願うほど身体の方は自分の意思とは反してさら

にいやらしい体液を分泌していく。

濡れ始めている性器を隠すこともままならず、ユニは少し呼吸を荒げ、脚

をガクガク震えさせながらただ自分の身体がえっちな気分によって興奮

していることを悟られないよう折るばかりであった。



ぞく

ぞく

ぼたり。
ユニがいるちようど真下辺りの床に、雨が降り始めたときのような丸染みが浮かびあがる。
とうとうアソコから溢れ出た愛液が床にまで垂れ、その水滴が床に染みを作っていくのであった。

（これ……ユニちゃん明らかに興奮してるよな……）
なんとかバレないように平然を装ってユニだったが、その努力も虚しく男には全てが察せられていた。

「まああれだけアソコを濡らし、妙に足をモジモジさせ、たまに色っぽい吐息を洩らしているれば気付かない方が無理だというものだ。」
目の前で発情した裸体を見せ付けられた絵描きにある思いがよぎる。（ユニちゃんのアソコを正面から見たい……）
当初は本当に真面目にデッサンの練習に励むつもりだったし、そういうよこしまな目的で始めたわけでもなければ彼女との約束通り変な目でも見ない。

これはあくまでも人体の構造の理解や陰影がどこに付くのかを研究するため、芸術の追求のためであった。
しかし、こんな性的な彼女の姿を間近で見ってしまうとつい悪い心が湧いてしまう。
一度やる口にしたことは最後までやり遂げるという妙に真面目なところがユニの性格を知ってか、男は次なる指示を出すことにした。「どんなポーズでも彼女ならしてくれるだろうと確信を持った上でのことだ。」

「つ、次のポーズしてみようか……。こちらを向いて椅子に座り、両足を立てるようにしてほしい」
ようやくポーズ変更の指示を受けたユニは安堵した。
……がそれも束の間。

「やっとなアソコが丸見えになっているポーズから解放されたのかと思っただが、男の指示通りのポーズを取ってみるとまたもや彼の目の前で恥部を晒すこととなる。
しかも今度は正面から向き合うため相手の視線をモロに感じてしまう。
「……はい。やったわよ」
椅子の上にはしゃがみ、M字開脚をするユニ。
チラッと絵描きの方に目をやるとやはり下腹部の辺りに視線が集中していることに気付き、身体がビクンと反応する。
（そんなに見ないでえ……）

愛液でぐしょぐしょに濡れた陰部がひくひくと動き、見られていることを意識してさらに女汁を溢れさせる。
椅子の上にもぼたっと蜜が垂れた。
赤面した表情を見られるのも、乳首が勃っているのも、アソコを見られているのも、えっちな汁で濡れているのも、その全てが彼女の羞恥心を煽っていた。

もはや男の顔などまともに見れず、視線を斜めに逸らしてひたすらボーリングをすることだけを考えるユニ。
しかしそんな彼女に絵描きの男はさらに追い討ちをかける。
「うーん……もうちょっと足を広げてもらっていいかな？」
「はあっ!?」

思わず大きな声をあげるユニ。



今でさえ死ぬほど恥ずかしい格好なのに、さらにアソコが丸見えにされることを要求されたのだ。

「これ以上恥ずかしいポーズをせがまれたら頭がおかしくなってしまう。」「さ、流石にこれ以上は……」

男の指示を断ろうとするユニ。しかし絵描きは何で彼女の秘部をもっと見ようと思考をフル回転させて論弁を垂れ流す。

「これはあくまでもデッサンの練習をする為なんだ。何一つおかしいことなんてない。今までだってそうだろう？ぼくは懸命に美を追求してきた。夢を追いかけるためにも一切の妥協は許されねえんだ。なあ頼むよこの通り！」両手を合わせて拝み倒すように懇願する絵描き。明らかにエロ目的であるのに平然と嘘を吐き、自身の夢でさえも盾にして女性器を見ようとする。しかし純粋なユニはすっかりその姿に騙されていた。

努力において妥協が出来ないという言葉が、必死に優秀な姉やネプギアに追い付こうと毎日人知れず頑張っている自分に突き刺さったからだ。しばらく考えた後、彼女は意を決した。

大きく両足を広げ、大胆に自分の恥部を男の前に晒す。女神という立場上、モンスターと戦わなければならないユニは日頃から戦闘に備えて身体の柔軟は欠かしておらず、百六十度ほどの大きな開脚を試みせた。

「こ、これでいいんでしょっ!?」

恥ずかしさをこまかすために荒げた口調で叫ぶ。開脚したことによって秘部のワレメは左右に広がって、ほんの僅かだが腰内の入り口付近のサーモンピンクの綺麗な色がその姿を覗かせる。既にユニの蜜芯は分泌された愛液によってぐちゃぐちゃに濡れており、その溢れ出した女汁が光を反射して股間周辺を照らしてと照り輝かせていた。入り口の薄い花びらが物欲しげにひくひくと震く。その姿がいかに何か別の卑猥な生き物のようであり、いやらしく発情している様子を際立たせる。

まだ年頃の思春期の女の子であるはずのユニの身体は、もはや完全に性目覚めており、わずかに秘部から花の香りのような女らしい匂いを漂わせていた。

ラストেশションの女神候補生という、国の中でも女神に次いで最も高い地位を持つ彼女が、このような大胆な開脚で発情した恥部を男の前で晒している姿など国中の誰もが想像できないだろう。そう考えると征服欲のようなものも湧き、絵描きはひどく興奮した。

「は、早く描きなさいよ……」

ユニは夢中で身体を見つめている男にデッサンの練習に戻るよう促す。裸を見られてアソコを濡らしてしまっている事実が完全に絵描きから知られ、さらにはその陰部の中の様子までもが観察されているのだ。

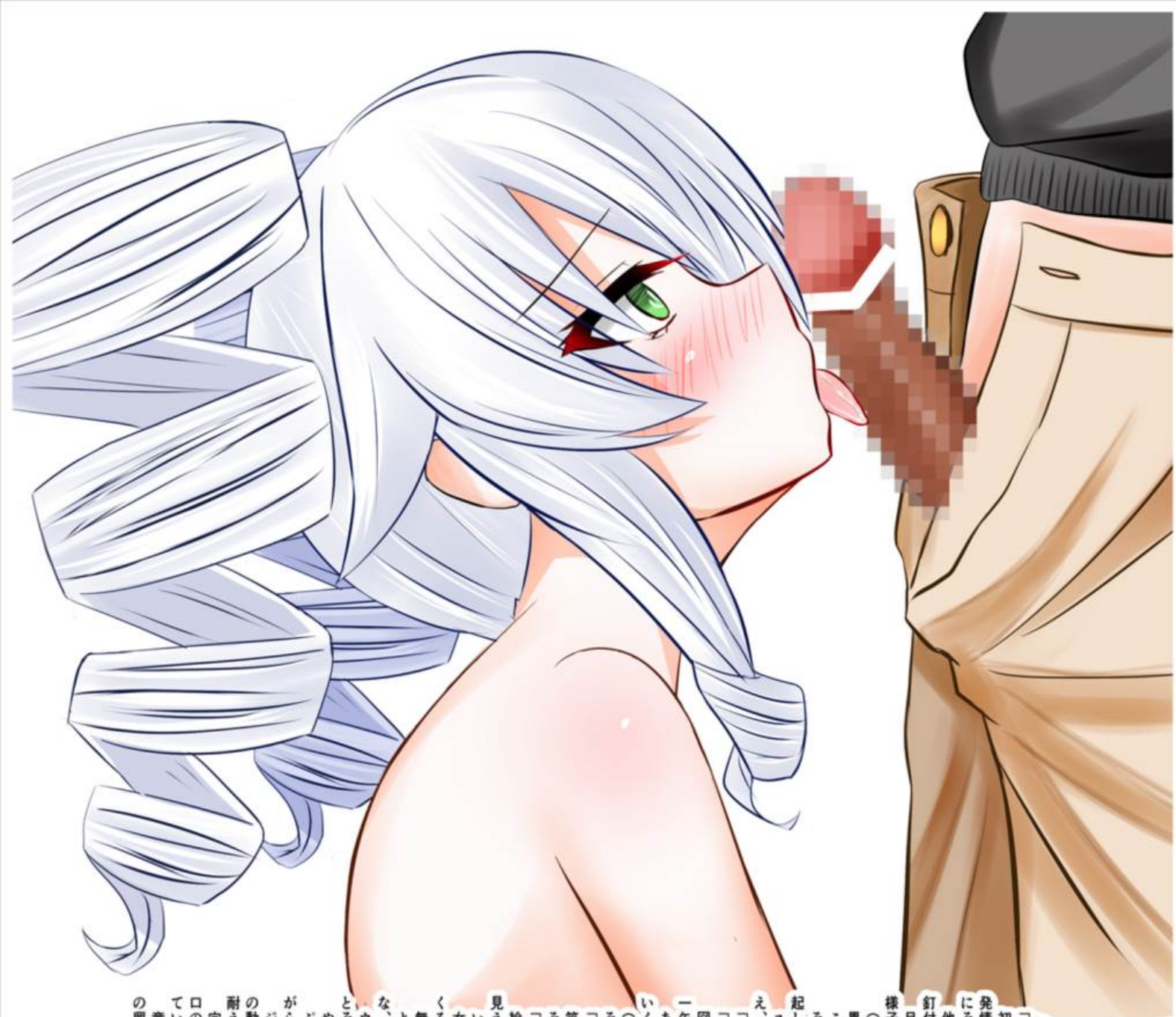
死にたくなる程の恥ずかしさが襲い掛かり、少しでも早くこの羞恥心から解放されたい一心であった。

「あ……ん……はあ……」

疼いてきた身体をなだめようと必死で耐えている内に呼吸が荒くなる。腫に涙を浮かべながら今もなお意志とは反して女汁を垂れ流しているその姿に絵描きの男はもう限界だった。

「こめんユニちゃんッ！」

そう言う男は、ユニ——もとい発情したブラックシスターの姿を見てギンギンに勃起したペニスを取り出した。



いきなり男根を露わにした絵描きにユニは驚いた。「な、なに出してんのよ!この変態っ!」

初めて見る男のペニス。ギンギンになっているソレは、その身近にある発情した膣の中に入ろうと硬く膨張させ、ユニの目の前で天に向かって上にそそり立っていた。

他人のことを変態と罵りながらも、彼女の方もまた、初めて見た男性器に釘付けになってしまう。

目を逸らそうと思っても身体は正直なようで、マジマジと男の発情した様子を見つめるユニ。

(うわあ……すごい……お、男の人のアレって……こんな風になるのね……) 異性の身体を知る興奮にドキドキが収まらない。

こんなこと、早くやめさせないといけないのに…… そう思っているのは裏腹に、もっと間近で見ようとだんだんと顔が勃

起したペニスに近づいていく。 ユニの吐息がペニスにかかり、その刺激を受けてビクンッと竿全体が震

え、先端から我慢汁が出てきた。 「……アタシ、アタシの裸を見てこんなにしちゃったの?」

「ユ、ユニちゃんだってアソコびしょびしょに濡らしてたじゃないかっ」 凶星を突くその言葉にムッとしたユニは、そのように反論する絵描きに

「矢報いてやろうと、彼の竿をペロッと舌で舐める。 あうっ!と呻き声をあげる男。ユニはそのまま竿に唇を寄せ、キスをして

いく。 (何か変な味……それに、ニオイも……これが男の人の……) そのまま夢中になって男根を舐め続けるユニ。

「はむっ……ちゅ……んふ……スッ……ちゅば……」 竿ばかり舐められ、どんどん龜頭から我慢汁があふれ出てくる。

それを指で絡め取り、どんな味がするのか興味本位で舐めてみた。 「しょっぱい……それに、ちよっとネバネバしてる……」

絵描きは自分の体液を舐めて感想を口にするユニの様子がとてもエロく見え、更にペニスを膨張させる。

いよいよブラックシスターの小さな口が龜頭全体を包み込んだ。 女神の口の中は温かく、唾液でヌルヌルであり、おまけに舌が絡みついて

くる。 無我夢中で男根を舐めるユニの姿に、ますます下半身に熱がこもる。 より一層大きくなった竿を小さな口で受け止めるユニを見て、苦しそうだ

な、と思いつつも一度膨張させた肉棒を萎ませることなど不可能だった。 ウェーブがかかった髪が口元にかかり、それを払いのけながら、んぐ……

とそれでも頬っぺいに飲み込み、根元まで唇をしがみつさせる。 やがて彼女の頭がリズムミカルに前後し始めた。

ぶつくりとして柔らかな唇が最大限に勃起している肉の棒を飲み込みながらピストン運動を始めている。

ジュブ、といやらしい音を立てながら男の精を搾り取ろうとするユニの動きは、初めてとは思えないほど気持ちがよく、高ぶる快楽に男は必死で耐える。

完全にスイッチが入っている様子の彼女は口全体で竿をしこきながらも口の中では舌をカリに遣わせ、頭全体を揺らすたびにお尻もくねくねとさせている。

意識しているのか、それとも無意識なのか。とにかくその仕事がかひどく男の興奮を誘っていた。



ユニの方も、ただでさえ裸を見られた興奮で濡れていたのに更にえっちなことをして尋常じゃないほど女汁を溢れさせていた。
太腿にまでその愛液が伝っていて下半身全体が汗と流れ出た蜜によりいやらしく湿っていた。

男性器を見るのも初めてだというのに口で愛撫をしているその行為に彼女自身も興奮し、右手で竿の根元をしごきつつ空いた左手は自然と自分の股間に伸びていく。

「あんっ……ふっ……うん……あ……はぁっ……ん」

艶めかしい声をあげながら自分で性器を弄るユニ。

今まで見られるだけで一切の刺激を与えられていなかった蜜壺は、ようやくきた直接的な快楽によって更に愛液を分泌させている。

クリトリスも硬く膨れ、その包皮を指で剥くとそのままクリクリとこねくり回す。

「んふう……っ……あむっ……レロッ……ずちゅっ」

鼻息で「ふーっふーっ」と呼吸を荒げながら漏れ出る嬌声やフェラチオをしている音が、部屋全体に響き渡る。

もはや周りを気にする余裕はなく、性的な刺激によってまともな思考は完全に出来なくなっていた。

絵描きの男は、勃起したペニスを口で啜えながら自分で秘部をまさぐるブラックスターの、貪欲に快楽を求める姿を見て限界を迎えそうだった

が女の子に一方的にされるのもなんだかなあと思いつつ反撃の手段を考える。(そういえば胸をさらけ出していた時に恥ずかしそうに乳首を意識していたなあ)

ふと真面目にデッサンの練習をしていたときのことを思い出した。

もしかして、と思いつかさず一生懸命筆を舐めている彼女の胸にそろそろと手を伸ばした。

「んっ……」

触れた瞬間、一瞬反応を見せたが、いやがらず黙って触らせてくれる。ふにゅと柔らかな感触を味わいながら僅かに指が膨らんでいない胸を

揉み、そしてその頂上で存在を主張していた乳首に指をやる。

そしてキュッと乳首を摘むと彼女の身体が大きくビクンと反応した。確かな手応えを感じ、そのまま乳首を弄り続ける。

裸を晒してただけで勃起していた乳首は硬くシコリを見せていて、指の中でその感触を楽しんだ。

乳首の形に合わせて円形になぞり、指で挟んだり、ピンと弾いたりする。ペニスを啜えながらもユニは上目遣いで、それ以上触っちゃ駄目だという表情をして男に訴えかけた。

しかしそれが余計に男心をくすぐる結果となり、男の指はさらに乳首を責め立てる。

「ふはっ……そ、そこは弱いから弄っちゃだめえ……」

とうとう啜えていたペニスを口から離し、腫れ潤わせながら弱々しく言葉で直接静止を呼びかけるユニ。

しかしここで止めたりできるはずもなかった。

「そっかあ。ユニちゃんは乳首が弱点なんだね。でもなんでそんなこと知ってるの？もしかして普段から弄ってるとか？」

「や、やだっ……違っ……」

「さっきからおち×ちゃんも夢中でしゃぶってるし、実はユニちゃんってすこくエッチなことが好きなんじゃないの？」

「そんなわけない……」

「裸を見られるだけでアソコをぐしょぐしょに濡らしてたのに、嘘はよくないよ」



男はこそぞとばかりに言葉責めをする。
彼女の方はというと、エッチなことが好きだと指摘され口では反論をしていたものの、その身体はさらに熱を帯びさせていた。
本来は変身するとDSになる……のだが、潜在的にはMだったのかもしれない。

現に男の言葉を受けて身体は悦んでいた。
指でクリトリスを弄りながら、子宮の奥からさらに粘り気のある女汁が溢れてきているのを感じ取る。

しかしユニはその事実を認めたくなく、これ以上男に何か言わせてはならないと猛反撃に出ることにした。

「……アンタ、いい度胸してるわね」

こうなったら徹底的にやっつけてやろうと、再び肉棒を咥え、激しく吸い上げた。

じゅぶっ、じゅぶっ、と音を洩らしながら首を振り、その動きに合わせて芋もしごく。

温かい口の中では舌がれろろと動き、カリや裏筋をなぞっていた。

彼女の本気の動きに我慢の限界が訪れ、絵描きの男はふと頭が真っ白になる。

「くっ……！」

ハッ、と気が付いたときにはブラックスターの口から大量の白濁液が溢れていた。

びくんっ！びくんっ！と淫靡しながら精液を乱暴に放出する肉棒が、彼女の小さな口の中で暴れている。

ユニはいきなり放たれた男の精に驚きながらも、口の中から溢れ出た精子を手で懸命に受け止める。

何の合図もなく自由奔放に精液を放たれて、まるで口の中を犯されたかのような気分になり、興奮して自分の秘部を弄っている指が激しくなった。

やっぱ絵描きの言うとおりアタシってエッチなのかも……
そう考えながらより硬くなったクリトリスを挿んでクリクリと弄り続け、ラストスパートをかける。

「んうう……ッ！」

ビクンッ！と一瞬大きく身体を震わせ、とうとう絶頂を迎えたユニ。

ふーっ、ふーっ、と大きく肩で息をしながらようやくベニスから口を離す。口内に放出された精子をどうしていいか分からず、吐き出すか迷った後、覚悟を決めたようにぎゅっ、と目を瞑る。

そしてゴクンと喉を鳴らし、口の中に出された大量の白濁液を思い切って飲み込んだ。

今日初めて出すであろう男の精はドロっとしていて濃厚であり、ゼリー状の濃い精液だった。

今まで味わったことがない変な味を感じながら、ジトッと男の方を見る。
「……いきなり出してんじゃないわよ……このヘンタイ」

そう男に言い、飲みきれずに口から溢れた白濁液に手を当てるユニ。

その粘液は唇と触れた手の間に白い糸を引かせていた。
（こんな濃い……アタシ……飲んじゃったんだ……）

自分の身体の中に生命の元である男の精が入り込んだことを意識すると顔が火照ってきた。

そして肩で大きく息をしながらまだ身体に残った先ほどの絶頂の余韻に浸るのであった――



数十分後――

一度、身体が絶頂を迎えたことで性的な興奮は治まり、既に彼女は冷静さを取り戻していた。

そしてフラッシュバックする数々の記憶。ユニの頭の中には今すぐにでも死んでしまいたくなるような恥ずかしい行為しかしていない自分の姿が浮かんでいた。

男の前で裸体を晒し、陰部やお尻の穴までもが丸見えになり、見られただけでアソコを濡らし、その上フェラチオをしながらオナニーまでしてしまっただけだ。

「男性経験も碌に無いというのにその場の雰囲気は流されてエッチなことをしてしまったことを後悔した。」

それも恋人ではなく、ただの異性の友人に対してだ。それに加えて、よくよく思い出してみると自ら積極的にエロいことをしていたような……

そりゃ年頃の女の子だし、そういうことに興味がなかったわけではないが、普段はクエストに教会の事務仕事など女神としての業務に追われる日々であることや、休日はネプギア達と遊ぶことが多く、異性と関わる機会が圧倒的に少ないこともあって初めて見る男性器に興味津々になってしまった。

無我夢中で肉棒をしゃぶっていた自分を思い出し、これじゃまるでただの痴女のような……と自省する。

「うわああああああっ！と頭を抱えてうずくまるユニ。このどうしようもない恥ずかしさが頭の中でいつしか怒りに替わっていき、その全ての矛先が絵描きに向かうことになった。」

「ア、アンタ……」

「ゆるっと立ち上がり、すぐさまこう叫んだ。男に向けて銃を構えるユニ。」

「アンタ本当に殺すわよっ!!」

顔を真っ赤にして涙を浮かべながらそれはもう怒涛の勢いで男に詰め寄っていく。

「今すぐアタシがアンタをあの世に送ってやるわ！覚悟はいいかしら!?」

「今ここでこの男を始末してしまえば自分の痴態は永遠に闇の中に葬り去ることが出来ると彼女は考えていた。」

ユニの目は本気だった。

「しかし男はまだ死にたくないで必死に謝り倒す。『ごめん！つい出来心だったんだ!!許してくれよ!!この通り!!』

「うるさい！うるさい！うるさい!!アンタなんか今すぐここで死んじやえばいいのよ!!」

「で、そんな!」

男の口の中に銃の先端を当てる。

「さあ辞世の句を詠むなら今の内よ!」

「無理!無理だよ!」

「遺言なら聞いてあげるわ!」

「め、女神様の慈悲が欲しいです!」

「そんなものないわよっ!」

「ラステイション教会の1室に二人の会話が響き渡る。こうしてモードモデルを引き受けたユニのちよっぴりえっちな体験談は幕を閉じるのであった――」

おわり



おまけページ



おまけページ



あとがき

どうもEXアルナムです。

あなたがこのあとがきを読んでいるということは私はすでに原稿を終わらせ、印刷所の締め切りに間に合い、コミケの審査にも通ったということなのでしょう。

ご購入本当にありがとうございます。嬉しい限りでございます。

さて、本作はブラックシスター本ということで毎日毎日仕事が残業になる中、如何にして自分の力量と限られた作業時間とぼくのエロに対するこだわりとで折り合いを付けるのかという部分が争点となりました。

そこで思い付いたのが「イラストにちょっとした小説のようなものを付け加えることでなんとかストーリー性を持たせられないか？」ということでありまして、小学校5年生の頃からフランス書院の官能小説を読んでいたエリート中のエリートのぼくはそれなりに文章力には自信があったので思い切って挑戦することにしてみました。

……が、実際に書いてみると話の構成だったり1ページあたりの文字数制限だったりでなかなか苦労させられましたね。

ぼくの書いたお話はどうでしたか……？楽しんで頂けたら幸いです。

しかし普段はイラストばかり描いているので文章を書くというのはすごく新鮮な気分でのいい刺激をもらいました。創作というのは絵でも文章でも楽しいものですね。

作中に登場する「絵描きの男」というのはシチュエーションCDに出てくる女神に添い寝してもらったり身体をつんつんしたり出来るうらやまけしからんあの男を想定して性格や言いそうな台詞などを考えてみました。ぼくがモデルじゃないですよ…(汗

そういえばブラックシスター様を題材にした薄い本はあんま見たことがないなあと描いてる途中で気付き、これはユニちゃんファンの方々からシェアを頂けるチャンスなのでは！？と勝手に期待しています。

みんなもっとブラックシスター様のちっばい描こう……？

コミケが終わった後はいよいよネブVⅡRの発売ですね。

ぼくは特典の「女神候補生をつんつんしちゃうCD」にすごく期待しています。

創作意欲が掻き立てられるような内容だったらいいなあ……

長くなりましたが重ね重ね読んでくださってありがとうございました！

感想などtwitterのリプでもpixivのメッセージでもなんでも構いませんので頂けたら嬉しいです。ではまたいつの日かお会いしましょう～

2017年8月13日(C92) EXアルナム

奥付

発行誌名 ブラックシスター様でヌードデッサンの
 練習したくない!?
初版発行日 2017年8月13日(C92 3日目)
著者 EXアルナム
発行 EXプロダクション
印刷 ねこのしっぽ様

Twitter 「@idol__picture」
PixivID 「13256561」
連絡先 「gear_idol@yahoo.co.jp」

無断転載、複製、複写、18歳未満の購読禁止

ブラックシスター様で

ヌードデッサンの練習したくない!?

